

先週の「つぶやき」で、日本国内の感染者の爆発的急増を踏まえ、本校は二十四日(月)から二十八日(金)までオンライン授業に切り替えたことをお伝えしました。三十一日の月曜日に登校日を設け、子どもたちの健康観察、学習用具の持ち帰り等を予定していましたが、それもならず。二月一日(火)より十日(木)まで、自宅でのオンライン授業の延長を決定。

三十一日(月)は、校長講話をオンラインで配信しました。

本当なら今日は、各教室からこの動画を見ていただくはずでした。残念ながらオンライン授業が延長されたために、君たちの身近で話すことができません。でも、今日は、先週の月曜日にお話した、「先生方と君たちとは、見えない赤い綱でつながっている。」ということについてお話します。

私の家にある、三冊の本を持ってきました。小さい文庫本の『中国怪奇物語』駒田信一著と、中ぐらいの『中国古典怪談』岩谷薫著、大きなこの本(中国古典小説選6 明治書院)。

この三冊の本には今から千三百年くらい前に書かれた『続玄怪録』の「定婚店」という話が出ています。この中ぐらいの本を使って、「あらすじ」を朗読風に読んでみます。

韋固(いこ)はなかなか縁談がまとまらず、

長らく嫁をもらいたいと切望していました。ある旅先で韋固は、月明かりの下、大きな布の袋にもたれ、見たこともない文字の本を読んでいる老人に出会いました。

老人は笑いながら、これは冥途の本で、あなたに読めるはずはなく、この本は世の中の結婚の帳簿であること、また、布の袋には将来結婚する男女の足につなげるための赤い縄がたくさん入っていると仰いました。

それを聞いた韋固は喜び、では、自分の縁談はいつになるのかと尋ねてみました。すると老人は、韋固の結婚はまだ先で、嫁になる予定の女は現在三歳だと告げました。韋固は将来の嫁が気になり、老人の案内でその三歳の女の子を見に行くことにしました。

―後略―

子どもたちにはあらすじを全部読みましたが、この後、韋固はとんでもない行動に出ます。それから十四年がたち、韋固は十六、七歳の美しい女をめました。ところが妻は眉間の金銀の箔(はく)で作った花飾りを外したことがなく、それをいぶかった韋固が理由を聞いてみると…。

この「定婚店」の話から「月下老人」という熟語ができました。それが、「氷上人」(あんな人が、氷の上に立って、氷の下にいる人という話をしている夢を見た。この夢にはどんな意味があるのかと有名な占い師に尋ねたところ、

これは、あなたが近いうちに『仲人』をするという前兆で、悪い夢ではないと答えた。)というエピソードを持つ熟語と合体して「月下氷人」という四字の熟語となり、結婚の仲立ちをする人である「仲人」を指すようになりました。つまり、「月下氷人」という四字熟語は、「仲人」のことなのです。

日本では、「小指と小指が赤い糸で結ばれている。」という言い方がよくされていますが、おおもとは、「赤い縄」だったのでね。



『続玄怪録』には「杜子春」という話も出ています。そう、芥川龍之介さんの「杜子春」の元になったお話です。太宰治さんの『思出』の中には、「私たちの右足の小指に眼に見えぬ赤い糸がむすばれていて…」と、書かれています。この大きな本に書いてあります。中国の古い話を日本語に訳したとしても、訳した人によって、随分雰囲気が変わります。それを読み比べたり、二つの「杜子春」を読み比べたり、「綱・縄・ひも」ってどう違うのかを調べたり、時間がたくさんある今のうち、ある事柄を中心にして、それが渦のように広がっていくようなイメージで、色々読んで、調べてみたりする、そんな学習をしてみたいかがです。

(立教小学校校長 田代 正行)